

屬する。元中の頃で、加賀住友次又はわさぎ友次と切るもの。應永の頃で、加州藤原友次と切るもの。應仁の頃で、加州藤原友次と切るもの。加州友次作永正十二年と切るものがあり、新刀期に於いては加州住友次於越前作之と切つた寛永頃のものがある。

トモツナ 友綱 加賀の刀工。藤島友綱と切る。古刀期に屬するが、年代不詳である。

トモナガ 友長 加賀の刀工。加州友長と切る。文明比の人。

トモノブ 友信 加賀の刀工。加賀國友信と切る。應永頃。

トモヒサ 友久 加賀の刀工。友久と切る。應永後。

トモヒロ 友弘 加賀の刀工。友弘と切る。藤島一派である。古刀期に屬するが年代不明である。

トモエシユウ ともぶえ集 一冊。扉に見風舎評、自序に安政二卯秋我柳とある。發句の集冊で、我柳は河北郡津幡の俳人矢田氏。金澤近廣堂廣岡屋興作枚。

トモマハリ 供廻 藩士の従へる平日の供廻は、年寄に在つては陸尺の外凡そ十人。人持組八千石以上はそれより一人を減じ、三千石以上亦一人を減じ、三千石以下の持組・諸頭役及び八百石以上の平士は大抵五六人、三百石以上の平士は三四人、三百石以下の平士は兩人又は一人を従へた。

トモヨシ 友吉 加賀の刀工。友吉と切り、藤島一派に屬する。明應頃。

トヤイリ 鳥屋入 本多政重所持の銘ある大脇指で、鳥屋入と銀象眼を入れてあるもの。蓋し政重初め屢その主を變へたが、前田利常

に來仕するに及んで、再び他に轉せぬ決意を表したものと云ふ。

トヤマジヨウ 富山城 越中新川郡に在つて平城である。武鑑によれば江戸との距離、東海道經由百六十六里、北陸道經由百四里、東山道經由百七十五里といふ。この地に築城した初は水越越前守勝重の時で、後神保氏三世之に據り、次いで上杉謙信の有となり、天正四年その將小笠原右馬助長隆、上杉民部信定を置いたが、六年九月織田信長の將齋藤新藤五は之を抜き、七年佐々成政が信長から越中四郡の守護職を命ぜられるに及んで、舊城を修して之に居た。十三年八月羽柴秀吉越中を攻め、成政の降を容れ、翌九月その礪波・射水・婦負三郡を收めて之を前田利長に與へた。

次いで十五年秀吉、成政を肥後に移し、その前領新川郡を假に前田利家に治せしめた。十八年利家の兵を關東に出した時、前田美作直知をして富山城を守らせ、文祿四年七月に至つて新川郡を純然たる領土として加賜せられた。慶長二年十月利長射水郡山城を去つて富山城に移り、四年閏三月利家薨じ、八月利長の大坂より歸封した時、己は直に金澤城に入り、前田直知を富山城に置き、五年又利長の出陣した時には、前田對馬長種を留守とした。十年六月利長封を弟利常に譲り、新川郡を致仕領に宛て、大に富山城を修めて之に移つた。十四年三月十八日颯川の河口柄巻屋平左衛門の家から火を發し、城の内外悉く焼失したが、獨り千石町神戸清左衛門の邸のみ災を免れた。利長乃ち之に入り、居ること三日の後、青山佐渡吉次の鎮する魚津城に赴き、次いで富山が平野の間に在つて、風威常に猛

烈のため、幕府に請うて關野を城地と定め、改めて高岡と名づけた。爾後富山城城代の有無は詳かでないが、唯大坂夏陣の際津田刑部正勝を留守させたことのみ傳へられる。寛永十五年幕府一國一城の制を定めたが、富山城は廢毀の列にはなかつた。十六年利常、子利次に封十萬石を分かつた爲、十七年十月利次入部し、假に富山城に居り、當時富山は利次の所領でない。城を婦負郡百塚に築かうとしたが、その費大にして容易に成らざることを慮り、萬治三年七月領邑一部の交換を行はれて、富山も亦利次の封内に屬するに至つたので、その地にある古城を修めて之に居ること

を請ひ、寛文元年五月朔日その許可を得た。是に於いて小將組木村瀨兵衛・遠藤安右衛門を普請奉行とし、天守を建て、櫓三ヶ所・二階門三ヶ所・冠木門七ヶ所・木戸七ヶ所等を造り、本丸二・三・九・三・曲輪の土居に掛屏を構へ、總構東西南三方の堀を擴大し、東出丸の濠は之を埋め、更に東方の堀を穿つた。その本丸は南類東西八十三間、西類南北七十三間、北類東西八十五間、東類南北百七十五間。三・丸は南類東西百二十六間、西類南北百七十間、北類東西二百八十間、東類南北百七十五間。西・丸は南類東西四十八間、西類南北五十三間、北類東西二百八十間、東類南北六十間。神通川は城の西南を繞り、颯川亦その東を流れる。延寶三年三月廿九日西田地方細野彌左衛門の長屋より出火し、偶南風烈しく千數百戸に延焼して、餘茨城内に及び、三・丸の米廩を灰燼とし、東西兩升形門も亦災に罹つた。

五年八月廿五日城郭修營の許可を得て起工したといふのは、即ち前災による破損を修理した

たものと思はれる。次いで正徳四年二月七日夜城中の坊主部屋から出火し、本丸の殿宇悉く焼亡し、是より以後侯族皆東出丸に假居した。享保八年正月十二日富山城背面の石垣崩壊すること十六間半、その石皆濠中に落ちた。寛政七年二月本丸北濠の石垣三ヶ所突出したので、三月修理の工を起し、十一月成つた。

天保二年四月十二日正午西田地方濱田彌五兵衛の家より出火し、南風最も強烈で、黄昏に及ぶ頃漸く鎮まつたが、城中の三升形・東出丸・西出丸・本丸の倉庫・諸役所悉く焼亡し、城下の社寺民屋亦災に罹るもの八千三百餘を算した。五月藩侯前田利幹江戸より歸り、近藤丹後・淺野大學の邸を假用して居館と政廳とに充てた。三年六月十五日城郭の修營を企て、閣老青山下野守に上書した。その趣旨は、富山城の本丸は往年焼亡の後、屋宇は現に存しなかつたが、三・丸の假屋二・丸の諸役所、その他諸番所、皆去年の災に罹つた。是を以て本丸内に前の三・丸の假屋の如き建築を設け、升形・櫓門等も亦假に之を造り、他年おのづから完備せしめんことを欲するといふにあつた。七月六日幕府その請を納れ、本丸住宅以下の築造を許した。後嘉永五年先に假に造つた大手門・升形櫓門その外諸番所・掛屏を舊の如く改め造らんことを請うて許され、先づ大手門・櫓門の工を起し、十二月十五日落成した。二年五月廿八日新たに殿宇を東出丸に築き、藩侯利保の居館とした。千歲御殿と稱するは即ち是である。又奇縁天滿宮を三・丸に創建し、その周圍に梅樹百株を植えた。然るに安政二年二月廿九日夜半、郊端西中野村の農平藏の家より出火し、南風偶強烈であ